

# 「記憶の場」の歴史学を目指して

——ピエール・ノラ『記憶の場』の方法を手がかりに——

吉 田 正 広

## はじめに

近年、歴史学の分野で、事実とは区別される表象そのものを歴史学の研究対象にしようとする議論が注目的になっている。例えば、「言語論的転回」の議論は、19世紀イギリスのチャーティスト運動を労働者階級や民衆など社会階級と関連づけるのではなく、言説分析によって政治史の文脈に位置づけ、18世紀以来の急進主義運動との連続性において位置づけようとするものである<sup>1)</sup>。これらの議論は新たな文化史研究として注目されてきている。実態とは切り離された表象そのものを歴史研究の対象とするこのよう議論の延長線上に、フランス国民史をシンボルの歴史として新たな構想のもとに描いたピエール・ノラ編集の『記憶の場』の研究が位置づけられよう。

ピエール・ノラによる『記憶の場』の出版は、1984年から1992年まで8年をかけ、120名の歴史家を動員して、130編の論文（総論的なものを含めると135編）を収め、全7巻、5600頁を超える膨大なものであった。日本語版の監訳者谷川稔氏の言葉を借りると、「ルゴフ、ル＝ロワ＝ラデュリ、アギュロン、コルバン、シャルチエといった当代一流の歴史家たちを総動員した執筆陣のレヴェルもさることながら、それが、『集合的記憶を表象する場』の分析をとおして『フランス国民意識のあり方を探る』という、単一の、きわめて繊細なテーマをめぐる展開されたことにも驚かされる。……ついには、『記憶の場Lieux de mémoire』という単語が、ロベールのフランス語大辞典に登場するまでになった<sup>2)</sup>」。

本稿は、ピエール・ノラ編集の『記憶の場』が提起した「記憶の場の歴史学」

とは何かについて整理すると同時に、「記憶の場」の議論の方法的有効性を検討しようとする研究動向論文である。その際、「記憶の場」の議論が歴史学や文学研究に対してどのような問題提起をしているのか、既存の歴史学や文学の方法論に対してどのような批判を展開しているのか、これらを確認する。

## I 日本における『記憶の場』の議論について

まず最初に、日本の学界では「記憶の場」の議論がどのように紹介され、どのような観点で注目されているのかについて大まかな概略を示しておこう。

『記憶の場』は、2002～2003年に岩波書店から日本語版が出版される以前から、西洋史その他の研究者のあいだで注目されていた。1996年には二宮宏之氏が、社会史あるいは心性史の延長にある「表象の歴史学」として紹介している<sup>3)</sup>。東京外国語大学のプロジェクトで記憶の問題を以前からとりあげていた岩崎稔氏は、「記憶」論としてノラの『記憶の場』の方法論を紹介している<sup>4)</sup>。岩崎氏は、『記憶の場』全体を、フランス革命200年祭を念頭においた「フランスの国民的アイデンティティそのもののオータナティヴ探しに関わる」ものと位置づけた上で、ノラの方法を展開した論文「記憶と歴史のはざまに」を詳しく紹介し、アルヴァックス以来の集合的記憶論の流れの中に位置づけている<sup>5)</sup>。

2000年5月には『思想』で特集号が組まれた。ノラの議論全体を論じた谷川稔氏の論文「社会史の万華鏡——『記憶の場』の読み方・読まれ方」が掲載され、さらに、ノラ自身による「記憶の場」の方法論を論じた「記憶と歴史のはざまに」、「三色旗」、「兵士ショーヴァン」、「ツール・ド・フランス」の4本の論文が訳出された<sup>6)</sup>。この特集号の「思想の言葉」において二宮宏之氏は、表象の歴史学の延長にノラの研究を位置づけ、「パブリック・メモリーやナショナル・メモリーを、そしてそれらの上に築かれる公式の歴史を、相対化し脱構築する」こと、「一見ナショナル・メモリーを受け入れているかに見えても、それを換骨奪胎して自己流に使い込んでしまうケースに事欠かないのだ。社会＝文化史の研究ではすでに馴染み深い、アプロプリアションやブリコラージュの実験場がこ

こにある。多様な記憶の場の解明を通じて、ぼくらはそこに、階級闘争ならぬ表象の闘争、記憶の闘争を見いだすことになるだろう」と指摘している<sup>7)</sup>。それに対して谷川稔氏は、ノラの試みを「第4のタイプの国民史」であり、「今一度フランスの国民的過去を再発見すること、すなわち『われわれの集合的遺産への回帰と、砕け散ったアイデンティティに焦点を合わせること』によって国民意識の範型の変容を見極めること、このプロジェクトに込められた重要な意図はそこにある<sup>8)</sup>」と指摘し、新しい国民史の誕生として捉えている。

その後、2002年3月には谷川稔氏ら翻訳者全員を迎えて、東京外国語大学海外事情研究所でシンポジウム「ピエール・ノラ編『記憶の場』をどう読むか一日日本語版の投げかけるもの―」が開催された。この時も出版前であり、安丸良夫、牧原憲夫、岩崎稔各氏のコメントは、印刷のゲラ刷りに基づいていた<sup>9)</sup>。

翌2003年11月には、ピエール・ノラ本人を迎えてのシンポジウムが東京外国語大学で開催され、「記憶の場」の意味および問題点が議論された。議論の中で、特にノラに対して、アルジェリア戦争に関わる戦争の記憶あるいは植民地の記憶が欠けているのではないかとの質問が投げかけられ、ノラ自身は、その問題について論文を書きかけたが、編集の仕事の中で完成しえなかったと答えている。それでも東京外国語大学のメンバーからこの植民地の記憶の問題が大きな欠落部分であることが指摘された<sup>10)</sup>。この時のシンポジウムでは、日本でナショナルヒストリーの批判的な検討をおこなっている成田龍一氏が発言している。イ・ヨンスク氏からも植民地の問題が厳しく追及された<sup>11)</sup>。

日本語版の出版後は、フランス文学研究者からも反応がなされた<sup>12)</sup>。さらに『史学雑誌』の新刊紹介で、2004年1月に第3巻「模索」が、6月に第2巻「統合」が取り上げられた。特に、第2巻「統合」を紹介した中野隆生氏は、第二巻はエッフェル塔を論じたもの以外は、1984年出版の論文であり、『記憶の場』の諸論文を読むときには最初の執筆時期を確認する必要があると指摘している。中野氏は、1984年の当初の諸論文の持つおもしろさ、方法上の利点について示唆している<sup>13)</sup>。また松本彰氏は、「多声的（ポリフォニック）な研究」というノラ自身の言い方に「ヨーロッパ中心主義的バイアス」を見出している<sup>14)</sup>。

このような検討の過程で、「記憶の場」の議論の問題点が植民地や戦争の記憶の欠落、新たな国民史になる懸念にあることが明らかにされつつある。

またこの間、日本人研究者による共同研究も進められた。阿部安成ほか『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』（柏書房、1999年）は、記憶に関する独自の観点でコメモレイションを分析し、正史（国民史）の構築性を明らかにした先駆的研究である<sup>15)</sup>。若尾祐司ほか『記録と記憶の比較文化史—史誌、記念碑、郷土』（名古屋大学出版会、2005年）は欧米のみならず、中国の記念碑文化や、近世日本の地誌、ドイツと日本の郷土史にも言及した比較研究である<sup>16)</sup>。これは、どれか一国のナショナル・アイデンティティを論ずるのではなく、比較研究を通じて、「記憶の場」の議論のうち、歴史書や地誌、記念碑について実証的にレベルの高い研究成果を提示している。

以上のような議論の中で確認できるのは、1984年の段階でノラがどのような意図のもとに『記憶の場』のプロジェクトを開始しようとしたのかを明確化する必要があり、それを体現する「記憶と歴史のはざまに」論文の持つ重要性である。ただし、この論文は大変難解であり、改めて論旨をたどる必要がある。本稿では、以下、この論文の論旨を整理するとともに、ノラの1984年時点でのプロジェクトの意図を改めて確認する。

## Ⅱ 記憶の場の歴史学——「記憶と歴史のはざままで」より

「記憶の場の歴史学」とは何かを考えるために、1984年に出された論文「記憶と歴史のはざままで」の内容を検討することにしよう。この内容をどう理解するかが、ノラの問題提起をどのように受け取るかを左右するからである<sup>17)</sup>。なお、以下、引用は、日本語版の該当ページのみを本文中に括弧で示すことにする。

### 1. 「記憶と一体化した歴史」の終焉

最初にノラは、「歴史の加速化」の中で記憶が存在しなくなりつつあるからこそ、記憶が問題となっていること、「記憶の場」が存在するのは「記憶の環境」

がもはや存在しないからであると主張する。具体的には、記憶の宝庫であった農民文化が消滅し、「グローバル化、民主化、大衆文化とメディアの勃興」によって世界が大きく変化し、周辺部では新興諸国が歴史性の中に引き込まれ、先進国では少数民族、共同体、家族が歴史性の中に引き込まれたことが指摘される。「記憶に基づく共同体」はもはや存在なくなり、教会、学校、家族、国家は、過去の価値観を伝達する役割を放棄してしまい、イデオロギーもその機能を果たさなくなった。このように、記憶と歴史の間の距離が拡大したことを確認する（29～30頁）。

この箇所では、記憶と歴史について定義する。記憶とは「未開社会が体现した、ありのままの社会的記憶であり、その秘密はそれらの社会とともに失われた」が、歴史とは、「変化の波にさらわれているために忘却を運命づけられたわれわれの社会が、過去から作り出すもの（30頁）」であるとする。こうして、現在、歴史と記憶の一致という自明だった事柄がついに終わったと述べる。

次に、ノラは、記憶は生命であり、生ける集団によって担われ、たえず変化し、想起と忘却を繰り返すものであり、集団からわきでるものであり、集合的で複数で個別であるとする。それに対して歴史は「つねに問題をはらみまた不完全であるが、もはや存在しないものの再構成」、「過去の再現（ルプレゼンタシオン）」であり、「知性に基づいた聖性を奪う作業」であり、「普遍的となる使命」をもっているとする。その使命とは、「自発的な記憶を破壊する批判主義」であり、「歴史の真の使命は記憶を破壊し抑圧することにこそある。歴史は、生きられた過去から正当性を奪う」ことであり、「究極的な聖性剥奪」であるとする（31～32頁）。

以上のように記憶と歴史の違いを明らかにしたあと、これまでの歴史は「記憶と一体化した歴史」であり、特に「フランスの国民発展史は、我々のもっとも強力な集合的な伝統」であったと論ずる。中世の年代記作家から現在の「全体」史の歴史家たちに至るフランスの歴史的伝統は、「記憶を正確に実行し、進んで深める作業」であり、「完全ですきのない過去を再構成する作業」であった。それに対して、現在は「批判的学問としての歴史学」「歴史学の歴史」の

時代である。「歴史学は自身が記憶の犠牲になっていることに気づき、記憶という異質なものを自身から追い出そうとする。歴史学全体が史学史の時代に突入し、歴史学と記憶とは一致しなくなる（32～33頁）」。

第三共和政期には、歴史学と記憶と国民が結合し、普仏戦争の敗戦の中で、実証主義史学は「国民統合のため、国民の歴史の連続性を支える柱」と位置づけられた。やがて、1930年代の危機の時代に、1929年『アナール』の創刊に示されるように、歴史学は変化し、これまでの記憶の伝統から離れて社会の自己認識へと変化した。その結果、歴史学は国民的アイデンティティから自らを解き放ち、価値伝達の教育的使命を失ったのである（34～35頁）。

この第一節の最後にノラは、「記憶の場」とは何かについて、少しずつ明らかにしていく。

記憶の場の研究は、第一に歴史学が自らを顧みるようになったこと、第二に記憶の伝統が失われつつあること、この二つの動きが交差する地点に位置するという。その結果歴史学は、歴史研究の基本的な道具と、三色旗、記念行事、祭典、パンテオン、凱旋門、連盟兵の壁といった、フランス人の記憶のなかでもっとも象徴的な事物とに、立ち返る（36頁）。

かくして、「記憶の場とはなによりもまず痕跡である。記憶を捨ててしまった後で記憶を是非とも必要としている歴史、その歴史に残されている記念意識を究極に体現したものである。記憶の場という概念が出現したのは、われわれの世界が儀礼を失っているからである。記憶の場とは、根底から変容し革新されつつある社会が、技巧と意志とをもって、生みだし、作り上げ、宣言し、また維持するものである。……博物館、文書館、墓地、コレクション、祭典、記念日、条約、議事録、モニュメント、神殿、アソシアシオン、これらはみな過ぎ去りし時代の遺品であり、永遠の幻影である。……平準化を原則とする社会における事実上の差異化である。そして平等で均質な個人しか認めようとしない社会における、帰属集団を見分けるしるしである（36～37頁）」。

記憶の場を生み出したのは、「自然な記憶はもう存在しないという意識」である。「放っておけばなされないからこそ、記録を残し、記念日を維持し、追悼演

説……生ける記憶という海の潮が引いたあと浜辺にのこされた貝殻のようなものである（37頁）」。

記憶の場の例としては、「ラ・マルセイエーズ」（フランス国歌）や第一次世界大戦の戦没者追悼碑があるが、そこには、「帰属と遊離の入り交じった感情」が見られる。「7月14日」（革命記念日）は、1790年にすでに記憶の場であったし、またいまだそうではなかった。1880年に国民祭と定められた時に公的な記憶の場となったが、今日、国民的記憶を失い、「われわれがもはや生きてはいない記憶が逃避する場」、「一致のない一致の場」、「ある象徴的な生がいまだうごめいている」場と位置づけられる。「記憶的なものから歴史的なものへ……と転換するとき、そこに記憶の場の時代がある。もはや国民を祝祭するのではなく、その祝祭を研究するのである（38頁）」と。

## 2. 歴史に捕らえられた記憶

第二節「歴史に捕らえられた記憶」は、現代における記憶の問題を論じている。

「真の記憶」は、「動作や習慣、ことばでは伝えられない技、身体の知識、技、すり込まれた記憶、本能的な反射作用のなかに潜む」ものであり、社会的、集团的、包括的で、直接的な記憶であった。これはすでに消滅し、現代では「歴史を通過することによって変容した記憶」が問題となる。これは「主意的な熟慮された記憶、義務として生きられる記憶」であり、心理的、個別的、主観的で、間接的な記憶である（38頁）。

ノラは、この「歴史を通過することによって変容した記憶」について次のように三つの観点から議論を展開する。

第一は、「記録としての記憶」、すなわち物質化した記憶である。

これは、文字（書写）とともににはじまり、ハイファイと磁気テープにおいて完成する。今日、記録することが脅迫観念となり、博物館、図書館、文書館、資料センター、データベースにおいて制度化された。このような事態は、文書の量的拡大と保存技術の進歩だけでなく、「痕跡に対する盲信と崇敬」に起因



する。かくして、「記憶の物質化」は短期間に膨張、拡大、枝分かれし、民主化し、誰もが回想録を記す必要性を感じるようになった。1980年の「文化遺産年」頃には、それまで「父もしくは母から伝えられた財産」の意であった「遺産」という言葉の意味が拡大し、「先祖から伝えられた財産、ある国の文化遺産」と定義されるようになった。「すべての記憶のしるし」を保存するようになり、記録の作成が至上命令化した。それは社会保障関係文書や、聞き取り調査への関心とによって例示される。かくして、「記録の無限の生産は、……歴史化された記憶のテロリズムのもっとも明白な表れ（41頁）」となる。

第二に、義務としての記憶である。

「歴史化された記憶」は、外部からのものであり、社会的に実践されていないため、個々人の義務として内面化する。記憶から歴史への移行に伴って、諸集団はアイデンティティを定義し直さねばならない。あらゆる集団が自らの成り立ちを探求し、起源を再発見しようとする。フランス公文書館での家系調査の利用者は研究者の利用率を上回っており、また、様々な学問が自己の歴史を研究しつつある。「記憶と一体化した歴史の終焉によって個別の記憶が増殖し、それらがみな固有の歴史を要求している」（42頁）。記憶は、社会的なものから個人的なものへと移行した。記憶が個々人に内面化されることで、自己のアイデンティティや、記憶のメカニズムや、過去とのかかわり方がまったく新たに組織されるようになる。「全体的な記憶が私的な記憶へ細分化することで、想起せよという命令は内的な強制力をもつに至る」（43頁）。記憶は、集団によって担われなくなると、自分自身を記憶と一体化してくれるような個人に宿ろうとする。「おまえはコルシカ人であるべきだ」、「ブルターニュ人でいなくてはならない」と命ずるように。ユダヤ人の記憶は、脱ユダヤ教化したユダヤ人の間で再び高まっている（43～44頁）。

第三に、距離としての記憶である。

かつての記憶と一体化した歴史学にとって、過去は「再びつなぎ合わせるべき系譜としての距離」であった。進歩と退廃が二大研究対象となり、連続性への信仰が示されていた。「起源」が重要であり、起源が偉大であればあるほど、



われわれは偉大になった。現在では、過去は、断絶のように感じる過去へと変化した。歴史の不連続の中に自らを投影する記憶へと変化した。「起源」を語るのではなく「誕生」を語るものであり、過去はわれわれとは切り離された世界となった（44～45頁）。

しかしながら、逆説的に、その距離は接近を要求し、その接近に共鳴をあたえる。われわれは、軍靴にとりつく土、紀元1000年の恐怖、18世紀の都市の臭気を求める。その場合、過去は、「再現（ルプレザンタシオン）であり、かつて再生（レジュレクシオン）が求めていたものとは根本的に異なる」。「過去の再現からは、広大な描写や断片や全体像が排除され、部分的照射や、選別的抽出や、有意な標本が用いられる。それはまさに網膜に映ったような記憶であり、きわめてテレビ向きの記憶である」。「物語の復活」はこれと関連している（45頁）。

「過去の日常生活に対する興味は、ゆっくりとした日常やものごとの味わいを取り戻す唯一の手段ではないだろうか。そして、名もなき者たちの伝記は、大衆は決して集団としてのみ理解されるものではないということをわれわれが感じる唯一の手段ではないだろうか。数多くのミクロストリア的研究が示す過去の泡沫は、再構成する歴史をわれわれが生きる歴史と一致させようという意図ではないだろうか」と問いかける。われわれは、鏡に映った「差違の中にアイデンティティが輝き出すのを期待」する。「われわれがもはや何でないかということに照らして、われわれが何なのかを分析する（46頁）」。

このような中で歴史家の役割も変化する。かつて、歴史家は「過去の語り部」、「将来への渡し守」であり、「博識な透明体、伝達媒体、もしくはできるだけ軽い橋渡し」であり、「客観性に取り憑かれた不在」であった。現在では、歴史家は「主題とのあいだに親密で個人的な関係を持つことを認める新たな人物」であり、「その関係を宣言し、主題を理解するための梃子とする」。歴史家の主観、創造力、再現力にすべてがかかっている。歴史家の重要性が増しているのである。かくして、「歴史学は認識論的段階に突入しており、アイデンティティの時代は完全に終わり、そして、記憶が歴史によって完全に押さえ込まれてし

まったいま、歴史家はもはや記憶する人間ではなく、自らが記憶の場になるのだ（47頁）」。

### 3. 記憶の場——もう一つの歴史

第三節「記憶の場——もう一つの歴史」においてノラは、「記憶の場」の歴史学についてより具体的に説明している。その論理を追ってみよう。

記憶の場には、物質的な場、象徴としての場、そして機能としての場という三つの属性があり、そのいずれの属性も同時にもっている。例えば、文書館は純粋に物質的な場であるが、象徴的雰囲気を与えられて初めて記憶の場となる。教科書、遺言、退役軍人会は機能的な場であるが、儀礼の対象になって初めて記憶の場となる。1分間の黙祷は象徴的な場であるが、時間単位の物質的断片であり、記憶の集中的な想起に用いられる。世代とは、人口上のことからであるので物質的な場であるが、記憶の結晶化と伝達を行うので機能的でもあり、少数者の経験した出来事や体験によって多数の者たちを性格づけるので象徴的な場でもある。

次に記憶の場を成り立たせる二つの要件がある。記憶の場を構成するのは記憶と歴史の働きであり、互いに作用しあっているが、そこには第一に記憶の意志がなければならない。記憶の意志がなければ、記憶の場は歴史の場となってしまう。第二に、時間と変化が介入しなければ、記憶の場の歴史は単なる記念碑の歴史に終わってしまう。言い換えると、「記憶の場の根本的な存在理由は、最小限のしるしのなかに最大限の意味を込めるために、時間を止め、忘却の働きを妨げ、ものごとの状態を定め、死を不死にし、そしてかたちのないものを具体化することにある……。けれども、記憶の場が存在するのは、その意味が絶えず変わり、その枝が予期できないかたちで茂る中で、変化に対して適応力を持っているからなのである。また、それゆえにこそ記憶の場は情熱を呼ぶのである（49頁）」。

この記憶の意志の存在と時間的変化という記憶の場の二つの要件についてノラは、二つの事例を取り上げて、特に強調する。革命暦は、すべての記憶に粹

組みを提供するとともに、「歴史に新たな書を開く」ことを目指していた。これだけで革命暦が記憶の場となるには十分であるが、革命暦が記憶の場であるのは、むしろ革命暦が作成者の望んだものになれなかった点にあるとする。テルミドール、ブリュメールなど永遠に革命暦に結びつけられた事件があり、「記憶の場の模様は折り重なり、歪める鏡のように増殖する。これこそが記憶の場の本性である」と（49頁）。

もう一つの例は第三共和政期の小学校の地理の読本『二人の子供のフランス巡歴』である。これは、当時の歴史教科書『プチ・ラヴィス』と同様、フランスの若者の記憶を形成し、フランス人のアイデンティティを植え付ける物語であったがために、記憶の場である。これは、執筆時（1877年）には存在しないフランスの過去を魅力的に描いていた。この読本は、第一次世界大戦前夜でも読まれていたが、初版が人気で、懐古的な伝統として読まれていた。そして忘れられた。出版100周年目の1977年に工業国フランスが経済危機を迎える中で再版が出され、再び集合的記憶の中へと入り、新たな忘却と再生を待つことになる。ノラは、『二人の子どものフランス巡歴』が記憶の場となるのは、最初の意図と、その記憶のサイクルが永遠に回帰することの両方によると強調している（49～50頁）。

次にノラは、この記憶の場の二つの要件によって記憶の場が序列化され、その領域と範囲が規定されるとする。大まかに言えば、「死者の崇拜にかかわるもの、文化遺産にかかわるもの、過去の存在にかかわるもの」は、記憶の場となりうる。また、厳密には記憶の場に入らないものでも、そこに入ることを要求するものもあり、さらに、記憶の場に属するものの多くは厳密には含まれるべきでないものもある。先史時代の遺跡、地理的な場、考古学の遺跡は記憶の意志が欠けているためにそれだけでは記憶の場とは言えないが、時間や科学、夢や記憶が込めた思いによって補われ、記憶の場となりうる。国境、憲法や条約はそれぞれ異なる資格において記憶の場である（50～51頁）。

これらの様々な記憶の場の中で、ノラは事件と歴史書という二つの記憶の場を重視する。「命ずるのは記憶であり、叙述するのは歴史である」。それゆえに

二つの領域、事件と歴史書が重要である。どちらも歴史における記憶の典型的な道具だからであると。

歴史書の中で記憶の場となるのは、記憶を修正するような歴史書である。13世紀の『フランス大年代記』は王朝の記憶を凝縮し、その後の歴史叙述のモデルとなった。バキエ『フランス考』(1577年)は王朝のトロイ起源説を打破して、ガリア古代説をもたらした。19世紀には、チエリ『フランス史についての書簡集』(1820年)、ミシュレ『近代史概説』、ギゾーのソルボンヌでの講義「ヨーロッパおよびフランス文明の歴史」(1827年)が歴史学の新たなあり方を提起した。最後は実証主義的国民史学であり、『史学雑誌』(1876年)がその到来を告げた。ラヴィス『フランス史』27巻がその金字塔となる(51～52頁)。

次に「大事件」のうち記憶の場となる事件は、①その瞬間にはほとんど注目されないが、未来が過去を振り返った時に、偉大な起源として意味づけられる事件、②起こった時点で自らの記念行事となるような事件である。①の事例は、987年のユーグ・カペーの即位であり、当初目立たなかったが、1793年のルイ16世処刑までには重要となる。②の事例は、「ルトンドの客車」(1918年)、「モントワールの握手」(1940年)、パリ解放時のシャンゼリゼ行進である。これらは、事件それ自体が問題ではなく、事件それ自体を排除することによって記憶の場が定義されることになる(52～53頁)。

記憶の場については多様な分類が可能であるとして、具体的な経験のもたらす自然な場(墓地、博物館、記念日)から、知的に構成される場(世代、係属、地域、フランスに関する「分割」概念、「絵画としての風景」)に至るまで、多様な分類の仕方があると述べている。

物質的な側面を重視した分類では、ユダヤ教の律法(トーラー)のような持ち運べる記憶の場、土地への根付きを特徴とする地理的な記憶の場(観光名所、国立公文書館・スービーズ館、国立図書館・マザラン館)、内在性が問題となるモニュメントという記憶の場(彫刻や戦没者追悼碑)、時間によって作られる総体としての記憶の場(シャルトルの大聖堂、ヴェルサイユ宮殿がこれに相当し、これらは社会や時代を映す鏡となる)がある(53頁)。

機能を基調とすると、退役軍人会は伝達不可能な経験を保つための記憶の場となり、教科書、事典、遺言などは、教育的機能を果たす記憶の場である（53頁）。さらに象徴の記憶の場としては、支配する場と支配される場がある。前者は勝ち誇った場、上から押しつけられる場、冷たさと威厳の場であり、サクレ・クール聖堂、ポール・ヴァレリーの国葬、ド・ゴールの葬儀がこれに属する。他方、支配される場は逃避の場であり、自発的な忠誠心と静かな巡礼の聖域となる。ルルドの民衆的巡礼、サルトルの埋葬、ド・ゴールのコロンベの墓である（54頁）。

その他多様な分類の可能性がある。公的な場と私的な場の分類があり、記念の機能しかもたない純粋な記憶の場（ヴェルダンの要塞、「連盟兵の壁」）と、記憶はその機能の一つに過ぎない記憶の場（国旗、祭列、巡礼）の分類も可能である。これらは、互いに明白な関連がないように思える事物が見えない糸で結合する。「記憶の場とは、国民の歴史がわれわれの時代においてとる姿である（54頁）」。

記憶の場の歴史学の研究対象について、ノラは次のように述べる。既存の歴史学においては、国民の記憶に対するものであれ、集合心性の記憶についてであれ、事実にかかわり、その現実をありのままの状態で把握しようとした。それに対して記憶の場の歴史学では、現実の中に指示対象を持たず、記憶の場それ自体が自身の指示対象となる（55頁）。

かくして、記憶の場の歴史学は以下のような特徴を持つ。「もっとも平凡であり、また同時にもっとも非凡なものでもある。明らかな主題と、もっとも古典的な材料。身近な史料と、もっとも洗練されていない手法。まるで、一昨日の歴史学に戻ったかのようなのである。しかし実際にはそうではない。……歴史学的考証は、それがもつ道具だけでなく、全体として、批判的な歴史学になるのである。新たな段階で生きるべく目覚めた歴史的考証である。純粋に転移の歴史学であり、戦争のように執行するだけの技である。そしてそれを成り立たせているのは、対象との関係が新たになったといえるかのような幸福感と、歴史家は各自まちまちに主題にかかわるという事実である。結局は、自らが動員するも

のにのみもとづく歴史学である。その動員されるものとは、わずかな、手に触れることのできない、かろうじて言い表せるようなつながりであり、これらの色褪せた象徴に対してわれわれがどうしてももってしまう肉体的な執着である（55頁）」。

そして最後にノラは歴史と文学の関係について論じている。「文学を大いに参照した。……じっさい、記憶が正当化されるには二通りのかたちしかなかった。すなわち歴史と文学である。……こんにち、境界は曖昧になり、記憶と一体化した歴史と、記憶と一体化した小説とのほぼ同時の死から、ある種の歴史が誕生したが、その歴史の威厳と正当性は、過去と新たな関係を取り結んでいる点にある。歴史とは、われわれが自分自身をそこに置いておこなう想像である。……歴史とは、深みを失った時代の深みであり、本物の小説をもたない時代のリアルな物語である。記憶が歴史の真中に祭り上げられたが、そのことは明らかに文学の喪を意味する（56頁）」。

## おわりに

「記憶と歴史のはざまに」は、ピエール・ノラがプロジェクトを開始するにあたって当初に抱いていた構想を端的に示すものであった。単なる「シンボルの国民史」に留まらない、方法的な広がりを持つものであったことが理解されよう。歴史学とは冷徹な批判の学問であり、歴史学自らを批判の対象とさえする。それがノラの言う「歴史学の歴史」の時代であり、実証主義史学であるフランス国民史に対して徹底した批判を展開する。記憶の意志を持つと同時に変化を経験する様々な「記憶の場」——同時に現実の中に指示対象を持たない——を、歴史学の冷徹な眼を通して、批判的に分析する。これが「記憶の場」の歴史学であろう。それは単に「フランスの国民的過去を再発見する」あるいは新たな「シンボルの国民史」を模索するのではなく、先の二宮氏の言葉を借りれば、「アプロプリアションやプリコラージュの実験場」であり、「表象の闘争」「記憶の闘争」の場であると言えよう。「記憶の場」の多様な分類を説明する中

でノラは、「記憶の場」としての歴史書と「事件」に重きを置いている。そのことは、時系列史に傾斜した戦後のアナールに対する批判を意図しているとも言えよう。様々な物質的な場だけでなく、機能的な場、象徴の場、純粋な場、記憶以外の多様な機能を持つ場、多種多様な場が研究対象となり、それぞれの場における「記憶の闘争」が明らかにされるのである。おそらくここに「記憶の場」の歴史学の魅力があるのではないだろうか。

## 注

- 1) 「言語論的転回」については、松村高夫「社会史の言語論的アプローチをめぐって——ステッドマン・ジョーンズ『チャーティズム再考』を再考する」『三田学会雑誌』第86巻第3号、1993年・2004および「〈階級〉概念は時代遅れか?——イギリス社会史におけるポスト・モダニズムとその批判的検討」『法学研究』第77巻第1号、2004年が、ステッドマン＝ジョーンズの見解とともに、論争史も紹介している。また、長谷川貴彦「修正主義と構築主義の間で——イギリス社会史研究の現在」『社会経済史学』第70巻第2号、2004年は、言語論的転回が出現した社会的背景にまで言及し、社会史研究の課題を提示している。なお、言語論的転回の議論の出発点をなした論文集が、長谷川氏の翻訳で出版された(G.ステッドマン・ジョーンズ(長谷川貴彦訳)『階級という言葉——イングランド労働者階級の政治社会史1832-1982年』刀水書房、2010年)。
- 2) 谷川稔「『記憶の場』の彼方に——日本語版序文にかえて」ピエール・ノラ編(谷川稔監訳)『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史—第1巻、対立』岩波書店、2002年、2頁。
- 3) 二宮宏之「歴史と記憶」『本郷』1996年6月。
- 4) 岩崎稔「ピエール・ノラの《記憶の場所》1」『未来』380号、1998年5月、2～8頁。
- 5) 岩崎稔「シモニダス・サークル」1～14、『未来』377～395号、1998～1999年。
- 6) 『思想』911号、2000年5月。二宮宏之氏の「思想の言葉」も掲載されている。その中で二宮氏は、「社会史にかえて社会=文化史、心性史にかえて表象の歴史学が提唱されて、すでにかなりの年月が経った」とした上で、その具体的な研究成果が積み重ねられる中、「誰もがその存在の大きさをひしひしと感じながら、その意味するところを十全にはつかめずにきた大作」として、谷川氏を中心として翻訳が進められたノラの『記憶の場』を位置づけている。
- 7) 二宮宏之「思想の言葉——歴史と記憶」『思想』911号、2000年5月、2～3頁。



- 8) 谷川稔「社会史の万華鏡——『記憶の場』の読み方・読まれ方——」『思想』911号10号、10頁。
- 9) 「特集1：記憶と歴史Ⅳ シンポジウム記録「ピエール・ノラ編『記憶の場』をどう読むか—日本語版の投げかけるもの—」『Quadrante クアドランテ』第5号、2003年5月、5～66頁。
- 10) 「特集1：『記憶の場』の問いから——想起すること／忘却すること／叙述すること——」『Quadrante クアドランテ』第6号、2004年3月。
- 11) 同上、27～30頁。
- 12) 工藤庸子「ピエール・ノラと「現在時」の歴史学」『UP』393号、2004年7月、22～27頁。
- 13) 『史学雑誌』113編6号、2004年6月、121～122頁。
- 14) 『史林』第87巻第2号、2004年3月、130～136頁。
- 15) 阿部安成ほか『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』柏書房、1999年。
- 16) 若尾祐司ほか『記録と記憶の比較文化史——史誌、記念碑、郷土』名古屋大学出版会、2005年。
- 17) 2002年3月に開催された東京外国語大学でのシンポジウムの討論の際に、上村忠夫氏は、ノラの議論は言語論的転回に対する一つの応答であるとの谷川稔氏の発言に対して、「プロジェクト全体の総序とも言える「記憶と歴史の間で」という論考をいったいどう読まれたんでしょうか」と問い、谷川氏と上村氏とではこの論文の受け取り方に違いのあることを示唆している。『Quadrante』5号、2003年、60頁。